

# 琉球大学学術リポジトリ

復帰準備（対内）（政府調査団派遣等）－総理府、  
運輸省、海上保安庁他－(2)

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2019-01-29 キーワード (Ja): 復帰準備 キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/43391">http://hdl.handle.net/20.500.12000/43391</a>

科学技術

11月30日(日) 日経 (朝刊) (73面)

# 沖縄さとうきび産業確立へ 二月ごろ調査団

科学技術庁

科学技術庁資源調査所(所長、瀬田三三三)は沖縄産さとうきびの依存状態から脱皮させるため、沖縄の重要な産物であるさとうきび資源を基幹とした関連産業のあり方を検討しているが、関連市場やその費用を細目にわたって現地調査を行うため、来年二月ごろ調査団を派遣する。

調査団は昨年三月から沖縄の全耕地面積の六五%以上を占めるさとうきびの総合的利用方法を調査しているが、さとうきびを主体とした工業コンビナートの構想を主眼として技術援助を報告してきている。この構想は、さとうきびを砂糖とてし糖分が残りた糖蜜(ムシ)

を絞った糖蜜状のヌカ(バカ)と、蔗滓(滓)を分別し、全部を資源として利用しようとしている。バカは貴重な繊維資源としてパルプやハードボードなどの人工木の原料になる。またバカは飼料に用いられ、糞尿も飼料利用に使用される。糖蜜は食用だけでなく、砂糖を原料とした界面活性剤の製造にも使われ、またこの余りの部分は、家畜の飼料や野菜の肥料に利用される。

これまで沖縄では、バカや蔗滓の一部が飼料や燃料に使われていたが、残りの大部分は放置されて公害の原因になる恐れもあった。世界的な木材原料の不足から、最近バカの繊維資源を利用した人工木材工場が一つ建設され、年間一五三万立方メートルの人工木材を生産しており、さとうきびの廃物利用の関心が高まっている。

調査団には、養蚕技術や製材技術の本土で外国から導入することによってさとうきびを有効に利用して、資源のない沖縄に産業基盤を確立させたいという意図がある。

調査団は、現在存在するさとうきび産業の別荘地帯(同約二五、三十億円)を、今後さとうきび関連産業を推進するために、同年間三百六十億円以上は増加できるとしている。次資源やエネルギーの消化など、不可逆的なものは、いっしょにさとうきび工場建設地や施設費などの調査をして、来年度中に報告書を作成し、沖縄の経済計画に役立てたいとしている。